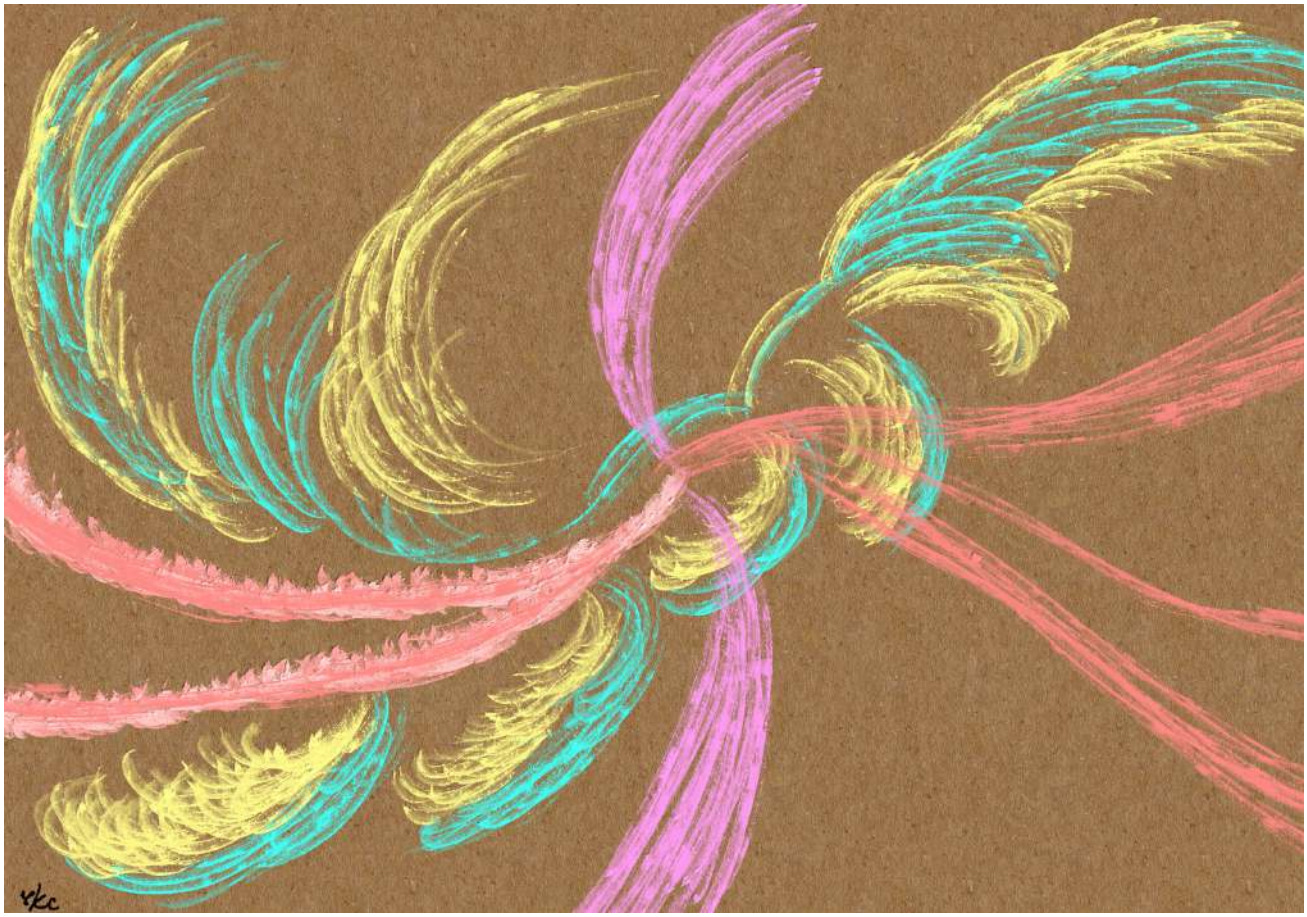
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 320

Website:「発達理論の学び舎」



No.1520 金沢出発の朝_The Last Morning in Kanazawa

© YOHEI KATO 2020

目次

6381. 再出発

6382. アムステルダムの異変

6383. オランダに戻ってきてから一夜が明けて

6384. 街の呼吸

6385. 象徴界の癒しに関する今朝方の夢

6386. フローニンゲンに向かう列車の中より

6387. フローニンゲンで迎える最初の朝に

6388. フローニンゲンの澄み渡る朝に

6389. 微光を浴びて/本日見た4つの映像作品

6390. 記憶/クリムト/浪曲

6391. 断食を終えて

6392. 通過儀礼を経て/今朝方の夢

6393. 『ア･ゴースト･ストーリー(2017)』と『Nスペ　人生100年時代を生きる(2018)』を見て

6394. 新居での生活に思いを馳せて/今朝方の夢

6395. 霧深き日の友との語らい

6396. 自己の言葉について/メタクライシスの時代における表現物

6397. 「写真」について

6398. “the fallacy of misplaced concreatness”/フォボスとタナトス/名乗ること

6399. 引っ越しの再考/Netflix/今朝方の夢

6400. 借り物としての肉体と精神/本日見た映画より

© YOHEI KATO 2020

6381. 再出発

作りに作って作ること。寝ても覚めても作ること。この世界のどこにいても、日記を書き、詩のような曲を作り、絵を描くこと。それを止めることはない。

厠上でも戦場でもなりふり構わず作りに作ること。作ることを妨害するものは排除すること。文明社会の中で無駄に人と交わることが最たる妨害物である。ごく少数の親友たちを本当に大切にしよう。映画監督のクリント･イーストウッド監督の思想にあるように、国家など幻想的主体であり、人は国家のためになど生きることはできない。できるのは、愛する人たちのために生きることだけである。

今回の一時帰国に際して、神のようなゴキブリ、そしてゴキブリのような神を数多く見た。数多く見たというよりも、全員そうだった。自分もまたそうした存在である。薄汚れた世界と神々しい輝きを放つ世界のはざまで、全存在者がその瞬間にその場にいること。これは奇怪なことであり、同時に奇跡的なことでもある。

自分は、種々の実存的時空間を行き来して、自己が確かにそこにあるという存在実感を得るたびに、妙な笑みが溢れる。逆に言えば、そうした笑みがなければ、自分は存在根拠を失ってしまうだろう。実存的笑いだけがなんとか自分をこの世界にとどめてくれる。

時刻はオランダ時間で午前10時となった。今朝の起床はゆったりとしていて、午前5時だったように思う。それは日本時間での話であり、今は日本時間で言えばもう午後6時となる。

アムステルダムに到着するまで、気づけば早いもので、あと4時間となった。再び始まる。再び新たな人生が始まることの歓喜で存在が爆発しそうである。多くの人はなぜだかそうした実存的歓喜によって吹っ飛ぶことをしない。そうした歓喜に気づきもしないし、感じられもしない。存在が木っ端微塵に吹き飛ぶことを体験することは、発達プロセス上の登竜門だと思うのだが、そうではないだろうか。

全部やり直すこと。オランダでの新生活は、新世界への足掛かりとすること。文字通り、何から何までやり直す。自己の存在を木っ端微塵にすれば、精神的人生は何度でも再スタートさせることができる。それこそが、人生が死と再生のプロセスであと言われる所以である。

© YOHEI KATO 2020

再始動の誓いを立てること。ここから数年後に、今の自分からは全く想像できない人間に向かっていくことへの誓いを立て、それを実行に移すこと。本当に何から何までやり直していく。自分が探究など行っていないに等しく、創作など行っていないに等しいことは、過去の偉人たちがその仕事を通じて明確に示してくれている。

狂気さを超えた正常さの中で探究と創作に励む人生を邪魔する存在は徹頭徹尾排斥し、それを励ましてくれる存在は首尾一貫して受容していくこと。人はなぜかそうした選択をせずに、欺瞞的人生に流されていく。存在の楔を自ら作り、自らの存在のうちにそれを打ち込む。その楔は固定的なものではなく、それが真に自己と人生を深めてくれるものであれば、それは可変的なものである。

ルーミー、リルケ、マラルメ、オーロビンドの詩を読み、そこから喚起されるものを曲の形にしていこうという考えがまた芽生えた。彼らの詩に加えて、万葉集や芭蕉の俳句などに対しても同様のことを行いたい。ある1つの詩や俳句に喚起されたものを曲にして、引用元を明記しておき、またいつか同様の詩や俳句を読んだ時に喚起されるものと比較できるようにしていく。詩的あるいは俳句的な音楽の探究。自分の関心はそこに向かっている。

4時間後、自分は再び自己を根底･深層から深めてくれるオランダの大地に再び足を着ける。全てはまたここから始まる。アムステルダムに向かう機内の中：2020/11/4（水）10:20（オランダ時間）

6382. アムステルダムの異変

「何かがおかしい…」アムステルダムのスキポール空港に到着した時、そのような予感があった。

関空からアムステルダムに向かうフライトは極めて順調であり、予定よりも30分近く早く空港に到着したのだが、そのような体験は初めてのことだった。空港に到着してみると、1ヶ月前の時よりも空港に人がおらず、とても閑散としていて驚いた。関空と同じぐらいに空港に人がいないことに素直に驚き、空港から活気が消え失せていた。

人がいない分パスポートコントロールは速やかであり、そもそも飛行機に搭乗している人もほとんどいなかったので、預けていた荷物もすぐにコンベアーで運ばれてきた。荷物を受け取って、いざ搭

乗口から外に出ようと思ったら、女性の係員に止められた。何やら引きずっていた2つのスーツケースの中身をチェックをしたいとのことだった。

ちょうど同じ便に乗っていた2人の日本人男性は、何事もなく外に出て行ったので、抜き打ちテストに引っかかったと思った。女性の係員に確認してみたところ、笑いながらそうだと言われ、2つのスーツケースを仕方なしに機械に通すことにした。もちろん中には危険物や違法な物は入っていなかったので、官僚的な手続きとして検査が行われ、その場を速やかに後にすることができた。

空港に降り立ったのは午後3時であり、そこからフローニンゲンに帰れなくもないのだが、11時間のフライトを考慮して、今日と明日は空港直結のホテルに宿泊することにした。ホテルに到着し、そこでも速やかにチェックインを行うことができた。何かがおかしいと思ったのは、ホテルの自室で明日の美術館巡りについて調べていた時である。

明日は、アムステルダム国立美術館に足を運ぼうと思っていたので、ホテルからの道順を調べてみた。チケットはウェブサイトを通じてオンラインで購入しようと思っていたので、ウェブサイトに行ってみたところ、なんと明日から2週間ほど美術館が休みになるとのことだった。そうであれば、レンブラント美術館に足を運ぼうと思って調べてみたところ、そこまた明日から2週間休みだった。「これは何かおかしいぞ…」そのように思って、今回は足を運ぶ予定はなかったが、ヴァン·ゴッホ美術館とそのすぐ近くにある現代美術館を調べてみたところ、軒並み明日から2週間休みになるとのことだった。

そこで私はハッとして、アムステルダムがロックダウンされたのではないかと思って調べてみたら、部分的にロックダウンされていることを知った。そもそもそれは私が日本にいる間の10月中旬から始まっていたらしく、美術館の一時期的な閉館を含め、その措置を強化するのが明日からとのことだった。まさかこのタイミングでオランダに帰ってくるとは予想だにせず、アムステルダムに宿泊することになったのも本当に偶然であった。どんなに探しても明日に開いている美術館は市内になさそうなので、明日は大人しくホテルの自室でゆっくり過ごそうと思う。

意外にもホテルには宿泊客がいたり、ビジネスミーティングのためにホテルのミーティングスペースを使う人もいることに少し驚かされる。今調べてみたところ、公共交通機関については一応動いて

いるようであり、明後日はなんとかフローニンゲンに戻れそうなので、それは一安心だ。アムステルダム:2020/11/4(水)20:27

6383. オランダに戻ってきてから一夜が明けて

時刻は午前4時半を迎えた。オランダに戻ってきてからの最初の朝がやってきた。

昨日に引き続き、今、アムステルダムのスキポール空港近くのホテルにいる。昨日オランダに戻ってきて、まさかアムステルダムが部分的なロックダウンになっているとは思ってもみなかったことである。オランダを含め、欧州のいくつかの国は、コロナの第2波の打撃を受けているようだ。中でもフランスの状況はとても深刻であることが報道されている。

一時期は落ち着いていたかのように思えたコロナも、ヨーロッパに戻ってきてここまで感染が再拡大しているとは思ってもみなかった。コロナの第2波の影響を受けて、明日にフローニンゲンに戻ってからの生活は、とても静かなものになるだろう。

昨日オランダに到着して、戻ってきたという感じがあった。外的世界はコロナで右往左往しているが、自分の内的世界は平穏であり、自分の心がとても落ち着いていることを実感していた。やはりこの国には自分が必要としている落ち着きがある。

昨日の機内の中で見ていたドキュメンタリーをふと思い出す。いくつか見ていたドキュメンタリーの中でも、インドの大気汚染を取り上げたものが印象的だ。世界で最も大気汚染が進んでいる15の都市のうち、なんと14がインドの都市だということを知った。番組の中でも、人は1日およそ2万回ほど呼吸をするらしく、呼吸によって取り入れる空気の新鮮さがどれほど身体にとって大切かが説明されていた。

私たちは食べ物だけではなく、空気によっても身体が毒されたり、癒されたりする。ヨガを含め、呼吸を大事にしている実践は数知れず、そうしたところからも呼吸がどれほど私たちの心身に影響を与えるのかについて考えることができる。番組内では、大気汚染の問題に真摯に取り組む個人や企業が取り上げられていた。大気汚染の問題は、自分にとっても他人事ではなく、投資を通じてこの世界的な問題に取り組んでいきたいということを思った。もう間も無く資産ポートフォリオを組み替

えようと思っており、その際には大気汚染を含め、環境問題や食の問題に取り組む企業への投資を積極的にしていこうと思う。

時差ぼけもあってか、今朝方は何度か目を覚ました。そのたびに異なる夢を見ていた。いずれの夢もその時にはとても印象的だった。早速欧州を舞台にする夢を見ていた。舞台となったのはオランダのこともあったし、別の国のこともあった。夢の中にいる自分は、たいていの場合日本語を話していて、時に誰かと英語で話をしていた。今、無意識が心身の調整だけではなく、言語に関しても日本語から英語に調整していることを知る。

今日からアムステルダムの美術館は2週間ほど閉館になるということもあり、今日はホテルの自室やレストランのあるフロアのワーキングスペースで時間を過ごしたい。コロナの拡大という不穏な状況とは打って変わって、今日もまた晴々とした天気のようなので、ホテル近くを散歩することも行いたい。本日は、創作活動、読書、映画鑑賞に没頭し、今日から本格的に始まるオランダでの新たな日々の弾みとなるような1日にしたい。アムステルダム:2020/11/5(木)04:50

6384. 街の呼吸

時刻は午前5時を迎えようとしている。静寂さに包まれている辺りの世界。今ここは、空港と隣接しているのだが、コロナの影響もあって、飛行機の離発着が少なく、とても静かである。

昨日空港に到着して電光掲示板を見ると、フライトの本数が本当に少なくなっていることに気づいた。果たして以前と同じような日常に戻ってくるのだろうか。「回復は長期戦になるのではないかと思っています。3年から5年ぐらいかけてゆっくりと以前のような状態に戻っていくのではないかと」そのようなことを昨日関空で訪れたラウンジの受付の方が述べていた。

1つ前の日記の中で、空気の新鮮さと呼吸の大切さについて書いていたように思う。確かに依然として食への関心は強いが、自分にとって望ましい食生活についてはかなり確立しており、良質なものを少量食べるということが徹底されている。昨日オランダに戻ってきたことをもってして、普段はヴィーガンとしての食実践をしていくことにした。食に関する探究と実践はかなり進んでいるが、今度は大気汚染の問題に関心が向かい、その問題に取り組む会社への投資を真剣に考えていこうと

思う。また、自分個人の生活として、空気がより澄んだ場所へ引っ越すということも近いうちに実現させる。当面は、フローニンゲンの中でより空気が綺麗な場所に引っ越しをしようと思う。

通りに面していなくて、近くに公園があったり、緑の植えられたバルコニーがあったりするような物件を探そう。そこからさらに引っ越しをする場合には、もう本当に自然の中での生活になるだろうか。フィンランドで森や湖に囲まれた生活が静かに想像される。

日本に一時帰国していた際に、街が呼吸をしているかどうかに着目している自分がいた。街の呼吸が浅い場合、どうも街の生命感が感じられない。そもそも街の呼吸の浅さをどのように感じているのか自分でも不明だが、様々な街を比較してみると、街の呼吸の度合いの差は歴然としている。街に浸透する文化の影響も大きいだろうが、それよりも景観を損なうような都市開発が街の呼吸を歪めている。

街に命を与え、それを育むような発想がない場所をいくつも見かけた。総じて、人工的かつ機械的な景観を持つ街が多くなっていることが日本の都市に対する危惧である。そこでは、街も人も苦しそうに呼吸をしている。身体的な呼吸を超えて、精神的な呼吸が苦しそうなのだ。それは閉塞感の呼び水となっているのではなかろうか。

先ほど今朝方の夢について少しばかり書き留めていたが、結局、夢の具体的な場面を思い出すことが難しかった。明恵上人が行ったのと同じく、夢を書き出すことを通じて、夢を再体験し、夢を主体的に生き直すことを意識していこう。仮に、単純に夢を書き出して、それを外から眺めているように見えても、書くという行為を通じて、夢を内側から再度体験し直すということを行っているのだと認識する。

夢の振り返りが無意識そのものを豊かに育んでいることを日々実感しており、それが創作活動にも少なからぬ影響を与えている。また、無意識の整理と浄化によって、顕在意識の働き方も変わってきていることは注目に値する。

今日はホテルでの自粛生活となるが、実りある1日になることを確信している。アムステルダム:2020/11/5(木)05:12

6385. 象徴界の癒しに関する今朝方の夢

時刻は午前4時半を迎えた。辺りはまだ真っ暗であり、昨日の様子だと、オランダで日が昇るのは午前7時半頃になることがわかった。

今日はいよいよフローニンゲンに戻る。まさかアムステルダムがロックダウンされているとは予想だにしなかったことであり、昨日からそれが強化されるというのもまた思ってもいないことだったが、結果として昨日はホテルの自室で自分の取り組みに集中することができた。日本にいる時は観光をしていたこともあり、作曲実践に充てる時間があまりなかったが、昨日は8曲ほど短い曲を作り、映画を5本ほど鑑賞した。それに加えて読書もしていたので、自分としては実りある1日だったように思う。

ホテルのチェックアウトが11時なので、それまでゆっくりとして、スキポール空港を11:04に出発する列車に乗ってフローニンゲンに帰ろうと思う。それはフローニンゲンに直行する便であり、フローニンゲンに到着するのは13:13とのことである。昨日と同様に、ホテルの朝食が始まる午前6時にレストランに降りて行き、そこでフレッシュジュースと暖かいコーヒーを一杯もらおう。

今のスキポール空港近辺の気温は7度であり、フローニンゲンに戻ったら、今夜の気温は2度まで下がるようだ。気温はもう冬のそれである。気温は低いが、幸いにもこれから1週間は秋晴れが続く。こちらの秋を楽しみながら、ゆっくりとオランダでの生活にアジャストしていきたいと思う。

今朝方は印象に残る夢を見ていた。場面として印象的というよりも、そこでモチーフとして現れていた自分の考え方が印象的であった。夢の中の私は、精神分析家のジャック･ラカンが言うところの象徴界の癒しに向けた取り組みを進めていきたいようだった。象徴界は言語とイメージの産物であり、象徴界を構成している言語とイメージの治癒に向けて自己を捧げようとしている自分がいた。

夢の中には「一瞬一生の会」の前回の受講生のある方が現れ、その方に象徴界の特徴と現状、そしてこれからの自分の取り組みについて自分の思いを伝えていた。私は日本の地方都市を訪れていて、現地の人だけではなく、日本人では気づけないような、その土地の象徴界の病理を特定し、その病理を癒す処方箋的取り組みを考えついていた。

夢から覚めた時、自分の脳裏にはビジョンの残像が残っていて、それらは1つ1つがとても美しい絵だった。中には、病理が持つ独特の美しさもあったが、それが絵画化されることによって、元の病理が治癒されているような印象を持った。それらの絵についてはもう具体的なものは覚えていないが、これから描いていく絵に何らかの影響を与えるだろう。アムステルダム:2020/11/6(金)04:46

6386. フローニンゲンに向かう列車の中より

たった今、スキポール空港駅を出発する列車に乗り込んだ。ここからフローニンゲンまでは2時間ほどの旅となる。

アムステルダムは現在部分的なロックダウンがされていて、オランダ全土で不要不急の外出は控えるように通達が出ている。そうした状況のため、列車はがら空きかと思ったが、乗客がまばらにいる。今、世界はコロナの第2波で騒がしくなっているが、車窓からの長閑な眺めを見ていると、そうしたことを忘れさせてくれる。世界は慌ただしくもあり、穏やかでもあるということ。そうした二律背反性は、コロナ下における今に限った話ではなく、世界はいつもそうなのだと思う。世界は私たちを超えた形で存在しており、私たちには世界からの投げかけとしての知覚体験があるだけなのだ。

今日から再びフローニンゲンでの生活が始まる。今日からゆっくりと家探しをしていこうと思う。登録しているいくつかのサイトから、条件に合致するような物件情報がメールで送られてくる。それを眺める限りだと、なかなか良い物件がちょくちょく出てくる。今度の引っ越し先には今の家と同様に、少なくとも4年は住むであろうから、慎重に選びたいと思う。これだと思える物件に巡り合えるまでは、ここから毎晩不動産屋のウェブサイトをチェックしようと思う。

昨日、幸せのありかはいつもこの瞬間のここにあり、それは探す必要もなく常在遍満するものであるという実感を得ていた。そうした感覚を絵と曲として表現していた。今こうして穏やかな朝の太陽光を浴びれることもまた幸せの1つである。オランダの朝の光は随分と柔らかいものになった。その柔らかさは冬のそれである。

日が昇るのは遅くなり、日が沈むのは早くなった。長い冬の時代を楽しむ精神的ゆとりがあり、それは精神のゆとりをさらに深めていく。オランダでの生活はゆとりに満ちている。

今回宿泊したスキポール空港近くのホテルの従業員たちの明るい対応を思い出す。ちょうど、感情労働に関するテーマについて昨日考えていた。一般的にホテルを含めた接客業において、感情が管理され、感情をサービスの一環として売ることが求められているが、オランダの接客業の人たちは、実に自然体で客と接しているため、感情が管理され、それがサービスの一環として売られているということをこちらに感じさせない点はとても好感が持てる。

今朝方ホテルのレストランで、昨日いただいたストロベリージャムをもらおうとしたところ、「申し訳ありません。今日はもうストロベリージャムはなく、アプリコットジャムしかないんです。それをストロベリージャムだと思って食べてください(笑)」という冗談交じりの言葉をレストランの人が述べ、私はその冗談に心が和んだ。日本であれば、きっとストロベリージャムがないという事実だけが伝えられ、それに対する謝罪しかないであろうということが想像され、その対照的な状況について考えざるを得なかった。感情が管理され、事実だけがやり取りされるような状況は実に寂しい。車窓から田園風景を眺めながら、今朝方のそのような出来事を思い出していた。フローニンゲンに向かう列車の中:2020/11/6(金)11:24

6387. フローニンゲンで迎える最初の朝に

時刻は午前6時を迎えた。フローニンゲンに戻ってきてからの最初の朝を迎えた。今この瞬間の外はまだ真っ暗であり、日の出の時間はあと1時間半後ぐらいだろうか。昨日の日の入りの時間を確認してみたところ、もう午後5時ぐらいには随分と暗くなっていた。ここからさらに日没時間が早くなり、日の出の時間はさらに遅くなるだろう。

フローニンゲンに戻ってきたことに合わせて、昨日の昼から断食をスタートした。昨日の朝はホテルで軽食を摂り、それ以降は何も固形物を摂取していない。今回の断食をどれだけ行うのかは定かではないが、少なくとも数日間に及ぶだろうと思われる。心身が欲する分だけ断食を行い、断食明けからはラクト・ベジタリアンではなく、そこから一歩進めてヴィーガンになっていこうと思う。

食に関してもどうやら段階があるようであり、ここにきて乳製品を摂取しない段階に来た。以前より牛乳やヨーグルトなどは摂取しないようになっていたのだが、チーズに関してはまだ摂取している自分がいた。オランダはやはりチーズが伝統食でもあり、バイオダイナミクス農法といった優れた農法で

作られたチーズが美味であることもあって、これまでチーズの摂取は続け来た。ところが今の自分はもうチーズも欲していないようなのだ。それは身体感覚的な直感から来るものである。この直感に従って、また新たな食生活を確立していこうと思う。ライフステージが存在するように、食に関してもステージがあることを実感する。

昨日の昼から断食を始めたことに伴って、日中の活動時間は増えるだろう。今日からは、日本から持ち帰った書籍を読み進めていく。まだ読んでいないものに関しては初読を進めていき、全ての書籍の初読を終えたら、既読書の再読を行っていく。今のところまだ読んでいないのは、映画評論に関する一連の書籍であり、それらを楽しみながら読み進めていく。そうした書籍を読みことに並行して、それらの書籍で言及されている実際の映画を見ていこうと思う。

昨日は結局、4本ほどの映画及びドキュメンタリーを見た。1日に3つから4つぐらいの作品を見ていくのが無理のないペースのようだ。今日もそれぐらいの数の作品を見て、気づきや発見事項を記録しておこうと思う。

今朝方は夢を見ていた。夢の中で私は、大学時代に同じサークルに所属していた1学年上の先輩と話をしていた。お互いに大学を卒業してから随分と時間が経っていて、これまでの歩みについて2人で話をしていた。先輩はアメリカの著名なビジネススクールでMBAを取得し、そのまま現地の投資銀行で働いていた。まさにエリートコースである。

どうやら今は日本に帰ってきており、その投資銀行の日本の支社で働いているようだ。世間から見れば順風満帆に見えるようなキャリアを歩んでいる先輩がポツリと、「今の仕事に閉塞感を感じていて、全く自由がない…」ということを述べた。私はただうなづき、黙って先輩の話の続きを聞いていた。

今朝方の夢の場面で覚えているのはそれくらいだろうか。その他に覚えていることとしては、夢の場面がすでに欧州の雰囲気を発し始めていたことである。昨日の日中においてすでに気づいていたが、いやオランダに戻ってきて、スキポール空港近くのホテルに宿泊している時から気づいていたのだが、自分の内的感覚と言語空間がすでに日本にいた時とは異なるものになっていた。そうした

移行が速やかに行われているのは肯定的だが、それがあまりに早すぎることもまた自分に対して負荷を与え過ぎることになってしまうかもしれないと思う。フローニンゲン：2020/11/7（土）06:30

6388. フローニンゲンの澄み渡る朝に

土曜日のフローニンゲンの朝は、静寂に包まれている。今、書斎と寝室の窓を開けていて、確かにもうこの季節の朝は随分と寒いのだが、新鮮な空気を取り入れることはとても気持ちがいい。

小鳥たちが自分を出迎えてくれていて、彼らは小さな歌を歌っている。何種類かの鳥たちが、思い思いに鳴きながらも、それが1つの曲として知覚される。

空が本当に澄んでいる。秋も深まりを見せているこの時期のオランダの空は殊に美しい。澄んだ空を眺めているだけで、自己の存在が澄んでいくかのようなのだ。

1ヶ月ほどこの街を留守にして戻ってきてみると、街路樹はもう裸の枝になっている。もちろん、紅葉をつけた木々もあるが、裸になってしまった木々が多い。

自分は再びこの街で生活を営んでいくのだということを改めて思う。自分を知っている人などほとんどいないこの街で。

自らを知っている人間がほとんど周りにいないということの落ち着き。そう、それは落ち着きなのだ。もっと言ってしまえば、それは異邦人性から来る落ち着きなのだと思う。

自分の孤独さが尊重され、それが守られているという絶対的な安心感がここでの生活にはある。残念ながらそうした生活は母国ではない。今回の一時帰国に際して、試しに人がほとんどいないような場所にも足を運び、そこでの生活を想像してみたが、結局のところ、誰かに見られているというような感覚を拭うことができなかった。

日本では孤独死の問題が社会問題化しているらしいが、本質的な意味での孤独は日本にはほとんど存在しないのではないかと思う。自分が求めているのは、自己を深めるのに必要な、いやそれ以上に重要なのは、自己を真に寛がせるために必要な本質的な孤独なのだ。

今日は風がほとんど吹いていない。予想通り、辺りが明るくなり始めたのは、午前7時半に近づいてきた頃だった。

今日は天気が良いようなので、街の中心部に出かけていき、BRITAの新しいボトルを購入したい。今使っているものはもう丸4年使っていて、外側が随分と汚れてしまっている。中のカートリッジを交換すれば、依然として美味しい水が飲めるのだが、容器そのものを買い換える時がやってきたように思う。久しぶりにフローニンゲンの街を歩くことになるであろうから、また色々な発見があるかもしれない。日々新鮮な目で自己と世界を見ていこう。澄み渡る空と同じように、澄んだ目で自己と世界を見続けていく。フローニンゲン：2020/11/7（土）07:49

6389. 微光を浴びて/本日見た4つの映像作品

時刻は午後7時を迎えた。昨日の午後にフローニンゲンに戻ってきたことを考えると、実質上、今朝からフローニンゲンでの生活が再度始まったような感覚があった。フローニンゲンでの再出発を祝福するかのように、今日のフローニンゲンは、雲ひとつない快晴に恵まれた。

本日は断食2日目であったが、午後に街の中心部に買い物に出掛けた。すると、街中では日本の人たちと同様に、マスクをしている人たちの姿をちらほら見かけた。特に、店に入る際にはマスクを着用している人たちが随分いたことに驚かされた。やはりコロナの第2波が猛威を振るっているようだ。

4年間使っていたBRITAの容器を新しくして、これで中身だけではなく、外見も綺麗な形で水を飲むことができる。これまで使っていたものは、中身は綺麗でも、外見が随分と汚れていて、洗っても落ちない汚れが付着していた。

中身のカートリッジはきちんと定期的に交換していたが、外見が汚いと中の水も汚く思えてしまう心理効果が働いているのではないかとふと気づき、フローニンゲンでの生活を再スタートさせることをきっかけにして、新しいものに買い換えることにした。以前のものは透明なものだったが、今回は少し青味がかったものにした。やはり心理効果が働いているのか、綺麗なボトルで飲む水が以前よりも美味しく感じられる。

街の中心部からゆっくりと自宅に向かって帰っている最中に、ふと足を止めて、こんなにも柔らかい太陽の光があるだろうかと思った。秋の深まるフローニンゲンの微光はとても優しかったのである。太陽が最も高く昇る時の日差しは、朝の太陽の光のように優しいものになっていた。

今日は作曲実践を旺盛に行い、映像作品を4本見た。フローニンゲンに帰ってくると、自分の取り組みに従事できる時間が十分にあることが本当に嬉しい。

本日見た映画とドキュメンタリーのいずれもとても印象に残っている。今、あまり外国の映像作品を見る気がせず、邦画を中心に見ている。今日は、『闇の子供たち(2008)』『砂の器(1974)』『震える舌(1980)』『精神(2008)』を見た。どれも違った意味で本当に素晴らしい作品であった。

なぜ自分は、これまで映像作品をあまり見てこなかったのだろうと大いに反省させられる。読書から多大な恩恵をこれまで受けてきたが、読書では決して得られない大きな学びが映像作品にあることを強く実感する。

2つ目に見た『砂の器(1974)』は、実に15年振りに鑑賞した。私たちにはそれぞれの宿命があり、それが時に交差し、宿命がより色濃いものになっていくことがある。最後のシーンにおいて、ハンセン病を患った犯人の父が取った行動は、真を超えた善そして美に基づくものだったのではないかと思う。このシーンは、15年前に見た時も大いに感動したのだが、今日見た時の感動は15年前よりもさらに深いものになっていた。この作品との再会を通じて、15年間の自身の歩みを知る。

明日もまた映画やドキュメンタリーを積極的に見ていこう。今のところ、1日に無理なく見れる作品数は3つか4つだという感覚がある。今日はこれからメールの返信を1通して、曲の原型モデルを作り、それでも時間が余っていれば、もう1つ何か作品を鑑賞したい。フローニンゲン:2020/11/7(土)19:37

6390. 記憶/クリムト/浪曲

時刻は午前4時半を迎えようとしている。開かれた書斎の窓から、1羽の小鳥の鳴き声が聞こえてきた。外はまだ真っ暗であり、日の出は午前7時半頃であるから、あと3時間ほどの時間がある。日の

出までの時間に随分と多くの取り組みができるだろう。絵を描き、曲を作り、読書をする時間が十分にある。

日が昇ったら、今日もまた何か映画やドキュメンタリーを見ていこうと思う。昨日、『砂の器』を見終えた後に、パソコンの画面上に、次のお勧めとして『ビルマの竪琴』が表示された。表示されたのは1956年に制作されたものだった。1985年に制作された作品の方の主演は、石坂浩二さんや中井貴一さんであり、こちらの作品は思い入れがある。

幼稚園か小学校低学年の時に、母方の祖母の家に遊びに行き、ある夜、この作品を祖母と一緒に見ていた記憶がふと蘇ってきた。それを見ていたのは、リビングでも、私が寝ていた畳部屋でもなく、現在叔父が使っている祖母の部屋だった。そんな思い出が蘇り、再びこの作品を見てみようと思った。

何らかの理論を学んだ後、はたまた映画や芸術作品を鑑賞した後に、それを体験した前後では日常や世界が違って見えることがある。それが真の変容体験である。

今回の日本への一時帰国を通じて、日常や世界が違って見える変容体験を積んだ。オランダに戻ってからは、精神的目眩のような現象を体感しており、その目眩が治るまでゆっくりと時間を過ごそうと考えている。そうした目眩とゆっくり向き合うことに並行して、昨日見た4つの映像作品はどれも印象的であったから、そこから得られた知的･体感的学びをゆっくりと消化していこう。

日本を離れる直前に、何かの雑誌を通じて、クリムトに関する記事を読んだ。クリムトにとって芸術とは女性そのものを象徴し、男女の愛を象徴するものだった。クリムトは、女性をエロスやタナトスの象徴だけとして見るのではなく、真理の扉としても見ていた。男女の和合を通じて開かれる真理の扉。それは本当に存在している。

日本の伝統芸能の1つである浪曲は、物語を描く芸であり、その源流には仏教における「説教」や「声明」があるそうだ。一度浪曲を聞いてみて、作曲実践に何か応用できないかを考えてみたい。短い曲の中により物語性を持たせること。短いながらもストーリーがあるような曲を作っていこうと思う。

夜明け前の外の世界を眺めながら、闇に癒されている自分がいる。人は光によって癒されると思いがちであるが、闇もまた深い癒しの効果がある。フローニンゲン:2020/11/8(日)04:38

6391. 断食を終えて

時刻は午後8時を迎えようとしている。オランダに戻ってきてから数日が経つが、まだ完全に時差ぼけから回復しておらず、この時間になると眠気が襲ってくる。しかも先ほど断食を終えたとこともあり、夕食を食べたので、尚更眠気が生じる。結局今回は、わずか2日間ほどの断食だった。2日間という短い時間であっても、胃腸を休めるには良い機会であった。久しぶりの断食を経て、胃腸が休まり、明日からの活動にまた弾みが付くだろう。

今日は結局、5本ほど映像作品を見た。昨日は4本ほど映像作品を見ており、今日はさらに1本追加した。書物を必要最低限読み、あとは作曲と映画鑑賞を繰り返すリズムが生まれつつある。こうした生活を意識的にしばらく続けていく。今の自分の探究において、読書よりも映像から得られることの方が多い。しばらくは映像作品を探究材料の核に据えていき、またどこかのタイミングで書物を読む量を増やすことにしたい。

今夜は本当に眠いので、返信が必要なメールに返信をしたら、昨日よりも早めに寝ようと思う。フローニンゲン:2020/11/8(日)19:58

6392. 通過儀礼を経て/今朝方の夢

時刻は午前7時半を迎えた。今、小鳥たちが大合唱をしている。その鳴き声に心がとても落ち着かされる。今、空は少しばかり曇っていて、ここから晴れ間を見せるようだが、夕方には小雨が降るという予報が出ている。今週は天気が良いようなので何よりである。

日本からオランダに戻ってきて数日が経つ。改めて、日本での体験を振り返ることが多い。

通過儀礼の形式として、人は離陸して混沌を経験し、再び着陸するという図式がある。今回の日本の一時帰国もまさにこの図式に該当し、自己を変容させてくれるような旅は全てこの図式に当てはまるように思える。

オランダを出発する前と後とでは、もはや異なった自分がいることに気づく。日本での体験は、肯定的な意味で混沌としていた。そうした体験と1つ1つゆっくり向き合いながら旅を続け、再びオランダに戻ってきてみると、新たな地平に着陸している自分がいた。日本での体験の本質的な意味は、それを消化･咀嚼するプロセスの中で、これからますます無意識の層から湧き上がってくるだろう。

今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、外国の空港にいた。雰囲気としてはオランダの空港だろうか。とても落ち着いた雰囲気があり、自分の心を安らかにしてくれるような雰囲気だったから、おそらくオランダのどこかの空港だろう。そこで私は、小中高時代の親友(SI)と話をしていた。話の内容は、まずは携帯についてだった。彼はまだガラケーを使っているようであり、それが珍しかったので見せてもらうことにした。

携帯を見せてもらった後に、お互いの目的地について話をした。彼の目的地は分からなかったが、どうやら私は日本に戻ることにしているようだった。しかし、自分の中では、日本に戻るよりも、どこか他の国に出かけていきたいという思いがあった。

今朝方の夢で覚えているのはそれくらいだろうか。実際には、もう少し場面があったのを覚えている。夢の中の感覚は総じて、肯定的でも否定的でもなく、中立的なものだった。夢から覚めてこの夢について改めて考えてみると、日本に滞在中は、いつもどこかのタイミングで複雑な気持ちになることを思い出す。寂寥感が国の根底に流れていて、それに触れる形で自分もその感情を抱く。

どの街にも穏やかさを見出す瞬間があるのだが、全体として衰退している感覚を抱かざるを得ず、目には見えない次元で街が荒涼としていることに心が痛むという体験をする。来年もまた日本に一時帰国するとは思うが、その際にどのように日本で過ごすのか、そして日本におらずしてどのように日本に関与していくのかを考える必要があると改めて思う。フローニンゲン:2020/11/9(月)07:56

6393.『ア･ゴースト･ストーリー(2017)』と『Nスペ　人生100年時代を生きる(2018)』を見て

時刻は午後7時半を迎えた。本日、月曜日の午前中は、まるで今日が日曜日であるかのように穏やかであり、心が深く落ち着いていた。そのような中で、映画を見る至福さに浸っていた。結局今日は、短い映画を含めて、6本ほどの映像作品を見ていた。

映画に関して印象に残っているのは、『ア･ゴースト･ストーリー（2017）』という作品である。この作品を見ながら、人間は絶えず何者かに見守られている存在なのかもしれないということを思い、時空間に階層的に堆積されているものの存在を思った。作品の中で登場した幽霊は、絶えず歴史を見続ける存在だったのだろう。人間は絶えず歴史の中に生き、歴史を絶えず作っていく存在であることを改めて実感する。

そしてドキュメンタリーに関しては、つい先ほど見終えた『Nスペ　人生100年時代を生きる（2018）』が終末医療と死について深く考えさせてくれる優れた作品だった。こちらは2つのシリーズ物になっていて、シリーズ1では、深刻な介護施設不足が懸念される中、切り札として登場した「サービス付き高齢者向け住宅（通称「サ高住」）」を特集し、認知症の高齢者の急増などで発生している思わぬ事態を取り上げている。また、シリーズ2では、全国の救命救急センターに衰弱した80代･90代の高齢者が次々運び込まれている現状を取り上げ、一命を取り留めても、意識が戻らないまま入院が長期間に及ぶことの問題が取り上げられている。

2つのシリーズを見ながら、死というものがタブー視されてきたことのツケを現代人が払わされ始めている姿を見た。自分も含め、死とどのように向き合っていくのかに関する教育と対話が現代人には圧倒的に欠けており、突然自分や身内が死と向き合うことを突きつけられた場合に、どのような意思決定をしたらいいのかがわからなくなってしまうのだと思われる。

人工透析の技術を含め、医療の進歩によって延命できるようになったことは、確かに喜ばしい側面もあるかもしれないが、死と深く向き合うことを避け、死に関する理解とその受け止め方の方針が定まらなければ、医療技術の進歩による単なる延命は不幸を生み出すだろう。（超）高齢化社会の到来に向けて、死に関する理解と内的成熟がますます必要になってきている。死に関する自己省察と対話の大切さを知る。

作品の中でも言及されていたが、認知症になってしまうと省察も対話も思うようにいかないのだから、生前に自分自身がどれだけ死について考え、そして家族を含め、自らの人生をどのように終えていくのかについて身近な人たちと対話をすることが極めて重要であり、その対話を文書に残しておくことがどれほど大切かを思った。「死への準備教育」を目的とする学際的な学問領域である「死

生学(thanatology)」に関する探究に乗り出すのもそう遠くないことかもしれない。フローニンゲン:2020/11/9(月)19:54

6394. 新居での生活に思いを馳せて/今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。辺りはまだ真っ暗であり、どうやら薄い霧がかかっているようだ。ぼんやりと街灯が光っている様子が見える。そんな中、数羽の小鳥たちが1日の始まりを静かに祝している。自宅周辺の落ち着きには本当に感謝したい。

昨夜は浴槽にゆっくりと浸りながら、改めて今の生活の落ち着きについて考えていた。ここからより静かな場所で生活を始めると、自己及び人生がどのように変わっていくのだろうと思った。

昨夜、街の空き物件に関するウェブサイトを見ていると、2つほど良さそうな物件を見つけた。どちらも共に少し前に空き物件として掲載されていたものであり、改めてそれらの物件を見たときに、何か響くものが自分にあった。今夜にでもそれぞれの物件を管理している不動産屋に連絡をして、物件見学をお願いしようと思う。一方の家には、ガーデニングができる庭が付いていて、写真を見る限りだと、小さな畑を作ることができそうだった。

もし仮にそちらの家に引っ越すことにしたら、何か栽培してみようかと思う。ちょっとした野菜か果物を栽培することについてぼんやりと考えていた。今回でなかったにせよ、いつか畑を持って野菜や果物を自分の手で育てたいと思う。その頃になれば、世界を旅することも少しは落ち着いているかもしれない。仮にまだ旅を続けていたとしても、旅の期間に生きていけるような植物を育てたいと思う。

暗闇を眺めながら、今朝方の夢について思い出している。幸いにも昨日からは、時差ぼけが完全に解消されたようであり、夕食後に睡魔に襲われることがなかった。眠りに関しても快眠であったことは喜ばしい。

夢の中で私は、オランダの街を思わせるような場所にいた。そこで数名の外国人の友人たちと歩きながら会話を楽しんでいた。しばらく歩くと、ある外国人女性の友人の家に到着した。彼女にDVDの渡し物があったので、家のドアをノックすると、中から彼女の母親が笑顔で出てきた。どうやら彼

女本人は今手が離せないらしく、私は彼女の母にDVDを渡し、「よろしくお伝えください」と述べ、その場を離れた。そこからも友人たちと会話を楽しみながら歩いていた。

今朝方の夢は、総じて楽しげな感覚を持つものだった。この夢の場面の前にも何か場面があったことを覚えている。その時の私は日本語を話していたので、周りに日本人がいたのだと思う。

今日もまた作曲実践と映像作品の鑑賞に多くの時間を充てていこう。作曲に関していえば、やはりバッハの曲が自分の心を深く癒してくれることもあり、バッハの曲をまた参考にしていこうと思う。いつも夜に曲の原型モデルを作ることを行っているのだが、その時に、フィンランドの作曲家たちの曲だけではなく、バッハの曲も1曲ほど原型モデルを作っていこうと思う。過去の偉大な作曲家たちから汲み取れることはまだまだ無数にあり、それらを十分に汲み取るまで、彼らの曲を参考にしていきたい。フローニンゲン:2020/11/10(火)06:44

6395. 霧深き日の友との語らい

今日はとても寒い1日だった。朝から外の世界は霧に包まれていて、午後3時半を迎えた今もまだ霧が濃いい。その雰囲気は、どこか推理小説の物語の世界の中で登場する街の一風景のようだ。

今日という1日を振り返ってみた時に、自分は今日という1日を何と形容するであろうか。美しき1日。きっとそのように表現するに違いない。それ以外に表現のしようがない1日だった。今日という日の美しさを感じさせてくれたのは、友との語らいだった。そう、今日はかかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンの店に行ってきたのだ。

以前髪を切ってもらったのは6週間前のことであり、日本に一時帰国する前のことである。メルヴィンの店にいく前に自宅を出発する時からすでにメルヴィンとの対話が楽しみであった。それは毎回のことであり、会って話すことが純粋に楽しみな友をこの国に持てたことには本当に感謝しなければならない。

メルヴィンはいつも私のために、他の客よりも2倍の時間を確保してくれていて、いつもゆっくりと話をする。店に到着すると、そこで挨拶を交わし、メルヴィンはすぐにダブルエスプレッソを淹れてくれる。メルヴィンの店のダブルエスプレッソは美味なのだ。おそらく豆はオーガニックなものでもなんで

もないと思うのだが、彼が淹れてくれるダブルエスプレッソには心がこもっている。それは味に大きな影響を与えている。

今日のメルヴィンとの対話も、実に多くのテーマを話した。やはり最初にコロナの状況について話をした。私が日本に一時帰国していたことはメルヴィンも知っており、この1ヶ月間の日本の状況についてこちらから話をし、メルヴィンからはオランダの状況について話をしてもらった。

そこから本当に多くのことを話していたので、今この瞬間にそれらを全て取り上げることはできない。だが1つ印象に残っているのは、コロナを受けて経営として大変な状況にありながらも、メルヴィンは引き続きホームレスやその他の支援が必要な人たちの髪を無料で切っているということである。

普段メルヴィンは月曜日が休みなのだが、毎月最初の月曜日は、どこかの施設の人たちのために店を開け、無料で彼らの髪を切っている。いつも私はメルヴィンから、サービスというものがなんたるかを教えてもらっているような気がする。奉仕の精神がメルヴィンには体現されていて、彼は自らの使命を知り、それを全うする過程の中で自らの存在を輝かせている。そう、彼の輝きはそうしたところに由来しているのだ。

メルヴィンは最近、レイキをはじめとしたエネルギーワークに関心を持っていて、本日店に到着した時には、読みかけのオランダ語の学術書の話をしてくれた。テーブルにその書籍が置かれていて、メルヴィンはその書籍のタイトルを英訳してくれ、それを日本語訳するならば、「創造の幾何学（The Geometry of Creation）」とでも訳せるだろうか。

私がメルヴィンを尊敬しているのは、奉仕の精神だけでも、愛の精神だけでもなく、もう1つには彼の学ぶ姿勢というものがある。彼こそが学徒という名にふさわしい。メルヴィンの学ぶ姿勢は、大学機関に所属する数多くの偽物の学者たちとは比べものにならないものである。メルヴィンは高卒であるが、彼が獲得･体現している叡智は、決してそこらの学者には一生かけても得られないものである。

メルヴィンとの対話が自然と頭の中で繰り返される。彼の店でなされる対話は、お互いにとって治癒と変容をもたらすものであり、私たちはその点についても話し合っていて、お互いにそれを実感している。一見すると治癒と変容と関係なさそうな対話の断片がふと思い出される。

メルヴィン:「ヨウヘイ、今回日本に帰った時の感覚は、母国に戻ってきたという感覚だったの？それとも、観光で訪れたという感覚だったの？」

私:「それは面白い質問だね。おそらく…どちらでもなく、異邦人性を突きつけられたという感覚だったように思う」

そのような回答が自然と出てきた。欧米での生活の年数を経るごとに、筆舌しがたい異邦人性の感覚が年々強まってきており、それが日本を旅している時にふと襲って来る。今回の一時帰国の最中にもそれがあった。不思議と実家にいる時にはそれをあまり感じないのだが、東京や大阪などの大都市に滞在している時や、地方都市を訪れている時にそれを感じる。その感覚にも発達段階のようなものがあり、確かに以前であれば、それは感傷的な感覚だったかもしれないが、今はそうした感傷性は希薄になってきており、より実存的な性質を強めている。

その他に、何か印象に残っている対話があっただろうか。あぁ、メルヴィンのチェスの先生でもあったホームレスのヨハンについて書き留めておかなければならない。

今から2年前、メルヴィンが自分の店をオープンする前に、店を自らリノベーションしていた時にヨハンと出会ったらしい。ある休日の朝、メルヴィンが店のリノベーションをしていたところ、ヨハンという高齢のホームレスが店の扉を開けたそうだ。

ヨハン:「こんなところで何やってんだ？」

メルヴィン:「自分の店をオープンするためにリノベーションをしてるんだ」

ヨハン:「何の店だ？」

メルヴィン:「美容室だよ」

ヨハン:「美容室？辞めとけ。この街には腐るほど美容室があるんだぞ」

メルヴィン:「わかってるよ。でも人と対話をしながら彼らの髪を切ることが自分の使命なんだ」

ヨハン:「そうか」

メルヴィン:「よかったら、僕が君の髪を切るよ」

ヨハン:「俺はホームレスなんだ。カネを持ってねぇ」

メルヴィン:「カネ？そんなものはいらないよ。カネの心配はせずに、今度うちの店に来なよ」

ヨハン:「気が向いたらな」

後日、初老のホームレスのヨハンはメルヴィンの店にやってきた。ヨハンはメルヴィンの何かを感じ取ったのかもしれない。

「最初ヨハンはあまり心を開かなかった」とメルヴィンは言う。どこか自分を防衛するような姿勢を取りがちだったヨハンは、徐々に心を開いていき、途中からはメルヴィンに心を開いて色々な話をし始めたそうだ。メルヴィンは、出会った頃のヨハンが背中を丸めていた姿勢を真似し、そこから背筋がピンと伸びたヨハンの真似をした。

ヨハン:「おい、お前、チェスはやるのかい？」

メルヴィン:「いや、やらないよ。でも興味はあるんだ」

ヨハン:「だったら俺が教えてやる」

メルヴィン曰く、ヨハンはチェスに関してプロ並みの腕前を持っているらしい。実際にヨハンは、チェスのプロを目指していたこともあるそうだ。

私:「最近のチェスの進歩はどうだい？」

メルヴィン:「実はチェスから少し離れてるんだ」

私:「どうしたの？」

メルヴィン:「ヨハンがしばらく店に来てないんだ…」

メルヴィンから話を聞くと、コロナウィルスが蔓延し始めたことをきっかけにして、ヨハンはパタリとメルヴィンの店に来なくなってしまったそうだ。

メルヴィン:「この間、新聞で死亡広告を見たんだ。3人のホームレスのうち、1人は知っているホームレスだったよ。でもその中にはヨハンはいなかったんだ」

そこからメルヴィンの話を聞くと、メルヴィンはつい先日、街の中心部でヨハンが歩いている姿を見かけたらしい。

メルヴィン:「ヨハン！久しぶり！元気にしてた？」

ヨハン:「おう」

そこで交わされたのはそれだけだったそうだ。ヨハンは静かにメルヴィンの前から去っていったらしい。

その話を聞いた時、ヨハンは何か思うことがあってメルヴィンの店に通わなくなったのだと思った。私は言葉を選びながら、ヨハンもメルヴィンも、人生のプロセスにおいて、新たな一歩を歩み始めたのではないかとメルヴィンに伝えた。

霧がますます濃くなっている。霧に覆われた世界の中に、輝く粒子が見える。この世界は、いつでも暗く、その暗さは増す一方であるが、いつでも光が存在している。フローニンゲン:2020/11/10(火)16:21

6396. 自己の言葉について/メタクライシスの時代における表現物

静かに流れ出て来る言葉。自分の言葉は自分のものではなくなった。それは確かに自分という1人の固有の人間から発せられる言葉かもしれないが、その所属は自分だけの中にあるのではなく、自分を超えたところにある。また、言葉が向かう対象も、もはや自己だけではない。

メルヴィンの店から自宅に戻っている最中、ふとこんな考えが芽生えた。一連の日記は、もはや自分のために書いているわけでもなく、誰かのために書いているわけでもなく、自己を含めた誰でもない誰かのために書かれているものなのかもしれないということを思った。

深い深い霧の世界。今日のフローニンゲンは濃い霧に包まれている。そして気温がめっぽう低かった。昨日から、ドストエフスキーの悪霊を基にしたロシアのテレビドラマを視聴し始めた。今日のフローニンゲンの雰囲気は、どこかドストエフスキー的な世界を思わせる。

雪とはまた違った独特な白銀世界が目の前に広がっている。確かにそれは少し濁った白銀なのだが、その濁りがむしろ、この世界に存在している光を見させてくれる。霧のために姿を確認できない小鳥たちが近くで鳴き声を上げている。彼らにとってこの夕方の時間帯は、朝と同様に、祝いの対象なのである。私たち人間は、1日のどの時間帯に祈りを捧げているだろうか。現代人は、そもそも祈ることをやめてしまい、それがなんたるかを忘れてしまっているのではないだろうか。

世界が廃れ、人々が直面する実存的課題が深まれば深まるほど、優れた表現者がこの世界に現れるという。それは多分に真実を内包している。現代は危機の時代、それも複数の危機が複雑に絡み合った「メタクライス」の時代であることは明らかである。そうした危機的状況の中だからこそ生み出される表現物というものが確かに存在しうることを思う。

今日は午前中にオンラインミーティングを1件行い、午後はメルヴィンの店に行って髪を切ってもらっていたので、今のところ6曲ほどしか作れていないが、映画に関してはすでに2本見た。可能であれば、今日はもう1つ映画を見たいと思う。本日見たのはどちらも洋画であったから、これから見るものは邦画にしようかと思う。

映画がもたらしてくれる非日常体験と、それによる癒しと変容について改めて思う。そこから、いつか映画を題材に多くの人と語らい合いたいという気持ちが芽生えてきた。まずは自分で数千ほどの映画鑑賞体験を積んでいき、身近な人に映画の感想を共有していこう。現在積極的に映像作品を見ていると、映像作品には、作り手の発達段階だけではなく、世界観や問題意識、さらには時代精神が投影されていることがわかる。

作り手の世界観の中に入り込むことや、自分の人生では生きることのできないであろう作品中の登場人物の人生の中に身を置き、そこで擬似的な体験を通じて他者の世界を感じることができるというのは映画の魅力の1つだろう。今夜の1本を何にするか、これからゆっくりと決めていこう。フローニンゲン：2020/11/10（火）16:36

6397.「写真」について

時刻は午前7時半を迎えた。今、空が少しずつ明るくなってきている。ダークブルーの空の下、小鳥たちが元気よく鳴き声を上げている。今日の彼らの声は、いつもより元気がいい。昨日までの予報では、今日は晴れのはずだったが、どうやら今日は1日中曇りのようだ。小鳥たちは天気ではなく、一体何に対して祝福の歌を歌っているのだろうか。

昨日は、久しぶりに友人のメルヴィンと話をした。彼と話したことの中で印象に残っているものについては、昨日の日記の中で書き留めていた。先ほどふと、そういえばメルヴィンが写真について述べていたことについて思い出した。髪を切ってもらっている最中に、客から電話があったことを思い出す。どうやらその客は、今年フローニンゲン大学を卒業し、これから職を探すことになっているらしかった。それに際してのプロフィール写真をメルヴィンに撮影して欲しいという依頼の電話だった。

メルヴィンは美容師であるだけではなく、写真家でもあって、美容室には写真撮影用のスタジオとしてのスペースもある。以前、メルヴィンが撮影した写真を見せてもらったことがあるが、実に見事な写真を撮影している。私は写真の専門家ではないので、写真の良し悪しを議論する観点はほとんどないのだが、彼の写真には歴史と物語が見える。撮影された対象が持つ歴史と物語が写真から浮かび上がっているかのように思えるのだ。

メルヴィンの話で印象的だったのは、「写真（photograph）」の語源は、「光（photo）」の「graph（描写）」であって、対象が持つ光を写し取ることが写真であるということを述べていたことだ。対象の持つ歴史と物語には光があり、その光こそがその対象の真実なのだ。写真とは、そうした真実を写し出すものなのだろう。光の見えない真っ暗な早朝の世界の中で、写真に関するそのような話を思い出していた。

今日もまた作曲実践と映像作品の鑑賞に大いに時間を充てていこう。午前中には1件ほどオンラインミーティングがあるが、それ以外の時間は全て作曲と映像作品の鑑賞に充てていく。今日は映画を4本ほど見て、時間があれば何かしらのドキュメンタリーを見たい。

書物だけではなく、映像作品もまた、無限に広がる世界の扉としての役割を果たしてくれている。その扉を開けて作品世界に入っていくと、これまで知り得なかった知覚体験を得ることになり、それを通じて自己理解と世界理解がまた少し広く、深くなっていく。本日の鑑賞体験を通じて、自己と世界の新たな側面を体験を通じて知ることになるだろう。それが楽しみである。フローニンゲン：2020/11/11（水）07:44

6398. “the fallacy of misplaced concreatness”/フォボスとタナトス/名乗ること

時刻はゆっくりと午後8時に近づいている。今日は1日中曇っていて、太陽の光を拝むことができなかった。予報によれば、明日は午前中から夕方に雨が降るようであり、日没がめっきり早くなったこともあり、明日もまた太陽の姿を見ることができないかもしれない。

今日は結局、映画を5本ほど見ていた。洋画を3本見て、邦画を2本見た。何かに取り憑かれたかのように、貪るように映画を見ている自分がいる。それによって、これまでとは違った形で自己と世界に対する認識が深まっている。映像の力は想像以上に強いものがある。明日もまた、今日と同じぐらいの数の映画を見ることができそうだ。1日5本をめどに映画を見ていくことは無理のないペースのように感じられているので、しばらくこれくらいの量を毎日見ていこう。

アルフレッド･ノース･ホワイトヘッドは、高度に抽象化された概念や理論を、その抽象度を無視して個別具体的な事象に適用する過ちを“the fallacy of misplaced concreatness”と呼んだ。この概念は、抽象的な概念を個別具体的な事象だと思い込んでしまうことの過ちを表してもいる。抽象度の過ちと、抽象と具体の過ち。それは世間の言説の中でよく見かけることである。

先日、クリムトについて言及していたように思う。そのことを思い出しながら、エロスの病理的な形として現れるフォボスについて考えていた。これは、恐怖と不安に駆られた上昇思考を内在しており、抱擁のない超越を希求するものかと思う。現代人の多くは、フォボス的な衝動に突き動かされてい

る形で生きている姿が見える。フォボスに加えて、アガペーの病理的な形として現れるタナトスについても目を向けなければならない。これは、死と破壊を象徴していて、死に向かう下降思考を内在的に持っている。

最近見た一連の映画の中にも、フォボスとタナトスの双方に突き動かされている現代人の姿をモチーフにしたものがいくつかあることを思い出す。フォボスとタナトスの双方に突き動かされながら、同時にそれらの板挟みによって堕落していく人間たちの姿が映画で取り上げられることがあるのだが、それは現代人の本質的な側面を描写しているように思えてならない。

そういえば一時帰国中に、「名乗る」という日本語について考えていることがあった。名乗るというのは、名前の上に乗るという意味なのだろうか。自らの名前を名乗るというのは、自分の名前に乗ってどこかに向かっていくことを意味しているのだろうか。名乗るという言葉の意味と、その行為についてもう少し考えてみたい。

外の世界の気温は低く、室内との気温差から、書斎の窓に霜が付着している。フローニンゲン：2020/11/11（水）20:06

6399. 引っ越しの再考/Netflix/今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。この時間帯の辺りは真っ暗であり、空の様子はわからないが、天気予報によれば、今日は小雨が降るとのことである。最高気温は11度、最低気温は6度であるから、それほど寒くはない。10月の初旬においては、フローニンゲンの方がヘルシンキよりも寒いこともあったが、今はもうそのようなことはなく、ヘルシンキの気温の方が随分と低くなっている。

昨夜改めてふと、フローニンゲンの現在の自宅に戻ってきて、この家での生活にさほど不満がないことがわかった。寝室と書斎は別れているし、家全体として1人で生活するには十分広く、シャワーとは別にゆったりと寛げる浴槽もある。そうしたことを考えてみたときに、焦ってこの寒い時期に引っ越しをしなくてもいいのではないかと思ったのである。

これからますます気温が寒くなるにもかかわらず、当初は年末あたりでの引っ越しを考えていた。現在の自宅にさほど不満がないのであれば、無理をして寒い時期に引っ越しをする必要はない。ま

た、現在不動産市場に出ている物件は、完全に自分が望む条件に合致するかというとそうでもないので、やはり再考が必要に思えてきたのである。

フローニンゲンの不動産市場については、友人のメルヴィンにも何度か話を聞いていて、賃貸よりも家を購入してしまった方が良い場合もあるので、家の購入を検討してもいいかもしれないと思う。購入した家に4、5年ほど住んで、それを売却する形でフィンランドに引っ越しをするというのも選択肢の1つである。いずれにせよ、年内に引っ越しをするという案は一旦保留にし、家を購入するにせよ、新しい物件を賃貸するにせよ、冬が終わり、春がやってくる頃にしようと思う。とりあえずはもう少し様子を見る。

昨日は5本の映画作品を見た。今、U-NEXTという動画配信サービスを活用しているのだが、それと並行してNetflixも契約しようかと思っている。当初はどちらのサービスを使うのか迷い、結局U-NEXTを選んだのだが、配信されているコンテンツは当然ながら重なるものもあるが、片方にあってもう片方にはないコンテンツもたくさんあるため、どちらかではなくて、どちらも契約してしまっていいように思ったのである。

Netflixのスタンダードプランであれば月々わずか1200円であるから、大きな出費では決してない。むしろ、映像作品を通じて探究活動に乗り出したのだから、Netflixと契約することは必要な投資のように思えてくる。Netflixは、オリジナルコンテンツが非常に充実しており、いくつか気になるものがあるので、近日中にまずはトライアルから申し込んでみようかと思う。

静かな朝の世界の中で、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、鯨の解体現場にいた。そこには見知らぬ日本人の男性が数名いて、その中には有名な芸能人が何人か混じっていた。彼らは各人大きなシロナガスクジラを捕獲し、思い思いに解体していた。解体の様子はそれほど残虐ではなかったが、ある男性が解体後の鯨を引きながら地面を移動させているときに、鯨の肉から赤い血が滴り落ちていた。彼らは思い思いに鯨を解体した後、そこからまた各人が好きなように料理することになっていた。私はその一部始終をただ眺めていた。

次の夢の場面では、大きな宴会会場に私はいた。そこでは、ある芸人の男性が、メロンソーダの巨大な瓶の中に入り、炭酸の泡が下から上昇してくることに合わせて、瓶の蓋の部分から飛び出して

きた。それはその芸人が売りにしているパフォーマンスのようだった。私も何かその場でパフォーマンスをやろうと思ったが、何がいいかを考えていると夢から醒めた。日本に一時帰国して以降、夢の世界は随分と落ち着いている。覚えている夢の量が減っていることは確かである。

今朝方の夢において、鯨のシンボルが出てきた。これは滅多に出てこないシンボルなので、それが何を示唆しているのか、ドリームディクショナリーを通じて少し調べてみようと思う。フローニンゲン：2020/11/12（木）06:45

6400. 借り物としての肉体と精神/本日見た映画より

時刻は午後7時半を迎えた。今、1日がゆっくりと終わりに向かっている。

早朝の天気予報では、今日は1日中曇りのはずだったが、夕方には晴れ間が見え、西日が差し込む時間帯があった。この時期の穏やかな太陽の光を眺めていると、心がとても落ち着く。それもまた自然の恵みである。

肉体も精神も、一時的な借り物として与えられた大切なものだという認識。そんな認識がふと芽生えた。肉体や精神を日々忙しなく働かせていると、実はそれがこの人生において一時的に貸し出されたものだということを忘れてしまいがちである。今日は、肉体や精神が貴重な借り物であるということに気づける瞬間があった。それはとても大切な気づきのように思える。

今日も昨日に引き続き、5本ほど映画を見た。欧米映画を2本、韓国映画を1本、邦画を2本である。今日は2時間ほどのオンラインミーティンがあったことを考えてみると、5本映画を見れたことは充実感を与えてくれる。

本日見た映画の中に、『しあわせの絵の具：愛を描く人 モード・ルイス（2016）』というものがある。この作品を見ながら、絶望な時代だからこそ傑出した表現者が生まれるということ、そして、その表現者が時代の何かと格闘している時に、良い表現物が生まれるということについて考えていた。本作のモデルになったカナダの画家モード・ルイスもまた、自身の障害やそれを取り巻く時代と格闘しながら絵を描いていたのだろう。作品中、モードが「窓が好き」ということを述べていたが、私もそうである。書斎の机は開放的な窓が見えるように設置していて、いつも窓をフレームにして、移りゆく外の

世界を眺めている。移りゆく世界を眺めているのが好きなのだ。外の移りゆく世界を眺めていると、自分の心の移りゆく景色があることに気づくことができる。絶えず変化するそうした心的景色を絵や曲として表現し続けていきたいと思う。

午後に仮眠を取り終えた後、以前見た『シン･ゴジラ(2016)』の作品に登場していたゴジラというシンボルについて考えていた。政官の意思決定が延びれば延びるだけ変容していくゴジラ。あれは、国家の意思決定の遅延に伴って悪化していく社会問題を象徴しているのかもしれないとふと思った。また、最後のシーンにおいて、ゴジラが撲滅されることなく凍結しただけだったというのは、日本社会の問題の根本が解決されず、問題の根元そのものは温存されているという暗示しているのではないかと思えてきたのである。

映画の中に出てくるシンボルに対して多様な解釈ができるということを踏まえてみると、ゴジラというシンボルに対してはまだまだ様々な解釈ができるだろう。いずれにせよ、仮眠後にふとあの映画を思い出して思ったことがあったので書き留めておいた次第である。

結局今年の年末は引っ越しをしない方向にいるので、年末は家を大掃除しようと思う。それによって気分を一新し、良い形で新年を迎えたい。書物以外に物はあまりないのだが、不必要なものは捨てて、家全体を身軽にしよう。そして、良い気を家に循環させたい。今年もなんだか良い形で締めくくれそうだ。フローニンゲン:2020/11/12(木)19:55